

# ともに歩む教会

— 習志野教会黙想会 —

小西広志（フランシスコ会 東京教区シノドス担当者）

2023年7月9日

## はじめに

皆さんこんにちは。東京教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は皆さんの黙想に招いてくださりありがとうございました。今日の黙想会を通じて、「シノドス的な教会」の具体的な姿について思い巡らしてみましよう。

わたしは、けっこう余計なことをベラベラ話してしまい、いつの間にか話が本筋から離れてしまう傾向がありますので、今日のお話の内容をすべてプリントで用意しました。読みあげる形で講話を行います。

2023年10月と翌年の10月に開催される「シノドス 世界代表司教会議 第16回通常総会」についてはご承知だと思いますので、そのあたりの説明は省きます。教区ニュースの今月号などにも書きましたから参考にしてほしいです。今日、皆さんと分かち合って行きたいのは、一つは「教会とはいったい何だろう」というテーマと、もう一つは具体的な教会の姿についてです。

午前中の講話では「『集う』教会」というテーマで聖書に登場する「集い」、「集まり」を表す言葉を手がかりに教会についての大切な点を味わっていきましょう。午後は「集う」教会の具体的な姿をわたしの方から皆さんに提案してみたいと思います。



Figure 1: Synod 2021 2024

# 1 「集う」教会

## 1.1 カハール

2「辜丸のつぶれた者、陰莖を切り取られた者は、**主の会衆**に加わってはならない。

3 混血の人は、**主の会衆**に加わってはならない。その子孫は、十代目になっても、決して**主の会衆**に加わってはならない。

4 アンモン人とモアブ人は、**主の会衆**に加わってはならない。その子孫は、十代目になっても、永久に**主の会衆**に加わってはならない。5 それは、かつてあなたたちがエジプトから出てきたとき、その旅路で彼らがパンと水をもってあなたたちを迎えず、アラム・ナハライムのベトルからベオルの子バラムを雇ってあなたたちを呪わせようとしたからである。6 しかし、あなたの神、主はバラムの言うことを聞こうとはされず、あなたの神、主はあなたのために呪いを祝福に代えてくださった。あなたの神、主はあなたを愛しておられたからである。7 あなたは生涯、決して彼らの平和や幸福を願い求めてはならない。

8 あなたはエドム人を忌み嫌ってはならない。あなたの兄弟だからである。あなたはエジプト人を忌み嫌ってはならない。あなたはその地に在留する他国の者であったからである。9 彼らに生まれる子供たちは、三代目から**主の会衆**に加わることができる」（申 23 章 2-9 節 フランシスコ会訳）。

【カハール (*Qāhāl*)】 旧約聖書のなかには人の「集い」、「集会」を表す単語がたくさん出てきます。ここでは一つを取り上げてみましょうカハール (*Qāhāl*) です<sup>1</sup>。

カハール (*Qāhāl*) は、動物の集合体には使われることがないようです。必ず人の「集い」に使われます。ヤコブが息子たちに祝福を与える場面（創 49 章 1-28 節）では、シメオンとレビに気をつけるように注意を促して、「わたしの心よ、彼らの集いに加わるな」とあります（6 節）。新共同訳は「わたしの心よ、彼らの仲間につながるな」となっています。カハール (*Qāhāl*) は人の集まり全般を表す言葉なのでしょう。『民数記』ではモアブがイスラエルの民が数多いので恐れて、「今やこの群衆は、牛が野の草をなめ尽くすように、我々の周りをすべてなめ尽くそうとしている」と語りました（民 22 章 4 節 フランシスコ会訳）。

しかし、この単語が祝福の文脈で使われているのは興味深いです。「全能の神がお前を祝福し、お前の子に与えて、子孫を増やし、多くの民の群れとなり」（創 28 章 3 節）、「わたしは全能の神である。産めよ、増えよ。一つの国民、多くの国民の群れがお前から起こり、王たちがお前の腰から生まれ出る」（創 35 章 11 節）、「わたしはお前に多くの子を与えて子孫を増やし、お前を多くの民の群れとする」（創 48 章 4 節）。いずれも神が語った言葉です。そして、人が個人ではなく「群れ」として神と向き合っていたことがわかります。

「モーセ五書」以外でもカハール (*Qāhāl*) は登場します。エレミヤはエジプトにいる偶像礼拝をするユダヤ人と対決しますが、そこに次のようにあります。「自分たちの妻がほかの神々に献げ物の煙を立

<sup>1</sup> 「集い」を表す言葉は、この単語の他に例えば、[’Ēdāh]、[Qbš]、[’Am] などがあります。

ち上がらせているのを知っていた男たちすべてと、居合わせた女たちの大きな群れ、またエジプトと下エジプトに住んでいる民全体はエレミヤに答えて言った」（エレ 44 章 15 節）。

さらに戦争に備えて集められた人々を指して使われています。「ここに集まっている人はみな、主が剣や槍によって勝利をもたらすものではないことを知るであろう」（サム上 17 章 47 節）。また、政治的な意味合いが強い「集い」でも使われます。例えばヤロブアムと民衆がこぞって王となるレハブアムのもとに参集した際に『列王記上』は次のように記しています。「人々は使者を使わして彼（ヤロブアム）を呼び寄せた。ヤロブアムとイスラエルの全会衆はレハブアムのもとに来てこう言った」（王上 12 章 3 節）、ここでもカハール（*Qāhāl*）が使われています。しかし、その一方で『列王記上』は祝い、祭りを行う民衆の「集い」についても語っています。「この時、ソロモンはすべてのイスラエル人、すなわちレボ・ハマトからエジプトの川に至るまでの大会衆とともに、わたしたちの神、主の前で、七日間、またさらに七日間、合わせて十四日間にわたり祭りを行った（王上 8 章 65 節）。そうしますと、カハール（*Qāhāl*）はイスラエルの民全般、しかも大人数の会衆を語る際に使われていることが分かります。

さて、このカハール（*Qāhāl*）という単語は、主なる神によって呼び集められた会衆の意味合いも持っていくようになります。最初に引用した『申命記』23 章で「主の会衆」とされているのはその例となるでしょう。その「集い」には主がともにいてくださるのです。それを他の箇所では「集会の日」と表現しています。ここでもカハール（*Qāhāl*）が使われているのです（申 9 章 10 節、10 章 4 節、18 章 16 節）。イスラエルの民は「集い」に呼び集められた際に、主が呼び集めてくださり、主がそこにいてくださるといふ実感を得ていたのだと思います。

こういった実感は律法が荘厳に読まれる時に強くなるものでした。

32 ヨシヤはその石の上に、モーセがイスラエルの子らの前で記した律法の写しを刻んだ。33 全イスラエルは長老、指揮官、裁き手、在留する他国の者、またその土地で生まれた者も、契約の櫃を担ぐレビ人である祭司たちの前で、櫃のこちら側とあちら側に分かれ、半分はゲリジム山の前に、半分はエバル山の前に立った。これは、主の僕モーセが先に命じたように、イスラエルの民を祝福するためであった。34 その後、ヨシヤは律法のすべての言葉、すなわち祝福と呪いをことごとくすべて律法の書に記されているとおりに読み上げた。35 モーセが命じたことで、**イスラエルの全会衆**、女、子供、彼らの間に在留する他国の者たちの前でヨシヤが読み上げなかった言葉は一つもなかった（ヨシヤ 8 章 33-35 節 フランシスコ会訳）。

「イスラエルの全会衆」とは「イスラエルのカハール（*Qāhāl*）」です。つまり「イスラエルの（神によって呼び集められた）集い」を意味します。イスラエルの民は、神による集団、団体として自分たちを理解するようになったわけです。『歴代誌上』の次の一節は印象的です。

1 ダビデは千人隊長、百人隊長、およびすべての指導者と協議し、2 **イスラエルの全会衆**に言った、「あなたたちが賛成し、またわたしたちの神、主のみ旨によるものなら、イスラエルの各地方に残る兄弟、また自分たちの町や放牧地にいる祭司やレビ人に使いを送って、わたしたちの所に来させ

よう。3そして、わたしたちの神の櫃をここに持って来よう。サウルの時代にはわたしたちは櫃を顧みなかったのだから。4このことは民全員に正しいと思われたので、**全会衆**は賛同した（代上8章1-4節 フランシスコ会訳）。

こうして、イスラエルの民は、神の民として整えられ、「集い」、歩いていく民となったのです。しかも、今回指摘した箇所から見えてくるのは、自分たちの足りないところや、非を認める民。そして自ら修正していく力を神によって備えられた民であるという事実です。

## 1.2 エクレジア

1 神のみ旨によってキリスト・イエスの使徒として召されたパウロ、並びに兄弟ソステネから2 コリントにある**神の教会**、すなわち、わたしたちの主イエス・キリストの名を至る所で呼び求めているすべての人とともに、キリスト・イエスと一致して神のものとされ、召された聖なる人々へ。イエス・キリストは、これらすべての人の主であり、また、わたしたちの主でもあります。3わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなた方にありますように（1コリ1章1-3節 フランシスコ会訳）。

**【神の教会】** 上記の箇所は原文のつながりが難しいと聞いたことがあります。翻訳の善し悪しは別として、まず「神の教会」という言い方に注目しましょう。

「集い」を表すヘブライ語「カハール (Qāhāl)」が、「イスラエルの集い」へと変わっていった様子をお話ししました。この「カハール (Qāhāl)」が紀元前3世紀に成立したギリシア語訳の聖書（七十人訳）では *ekklēsia tū theū*、あるいは *ekklēsia Kyríu* となります。二つほど例をあげましょう。

*ekklēsia tū theū* 「その日、モーセの書が民の前で朗読された。その中に、アンモン人とモアブ人は永久に**神の集会**に加えないと記されているのが分かった」（ネヘ13章1節）。

*ekklēsia Kyríu* 「2「**辜丸のつぶれた者、陰茎を切り取られた者は、主の会衆に加わってはならない。**3 混血の人は、**主の会衆に加わってはならない。**その子孫は、十代目になっても、決して**主の会衆**に加わってはならない。4 アンモン人とモアブ人は、**主の会衆**に加わってはならない。その子孫は、十代目になっても、永久に**主の会衆**に加わってはならない」（申23章2-4節）<sup>2</sup>

ご存知の通り *ekklēsia* は「呼び出す」を表す動詞の *ekkalèo* に由来します。「離れる」を表す接頭辞 *ek* と「呼ぶ」を意味する *kaleo* から成り立ちます。ですから、「ある場所から切り離して呼び出す」の意味合いでしょうか。それが、エクレジアの語源となります。

<sup>2</sup>これ以外に例えば申23章9節、代上28章8節、ミカ2章5節など。

ここにあげた『コリントの信徒への第一の手紙』の冒頭では「神のエクレジア」と表現されているのが印象的です。つまり、エクレジアに対してパウロは神的な起源をみていたことがうかがい知れます。そして、「神のエクレジア」は唯一でありながら、アンティオキア、コリント、エフェソなどのようにそれぞれの教会から成り立っているのです。もちろんエルサレムの教会に優位性と首位性があるは確かです。このあたりのことはコリントの教会がエルサレムの教会に宛てて献金をしたことから分かります(2 コリ 9 章参照)。

### 1.3 ともに作る教会

4 すなわち、わたしたちの主イエスの名によってあなた方が**集まり**、わたしの霊もともにそこにいて、わたしたちの主イエスの力をもって (1 コリ 5 章 4 節 フランススコ会訳)。

17 このようなことを指示するにあたって、あなた方の**集まり**が益とならず、かえって害となっていることを、わたしは、ほめるわけにはいきません。18 まず、あなた方が教会の**集まり**をもつとき、仲間割れがあるとのことですが、ある程度そうに違いないとわたしは思っています。19 確かに、あなた方の間で誰が本物の信仰者であるかはっきり分かるためには、仲間争いもあるに違いありません。20 それでは、あなた方が**一つに集まっても**、「主の晩餐」を食することにはなりません。……33 それで、兄弟のみなさん、食事のために**集まる時は**、互いに待ち合うようにしなさい。34 もし、誰かが腹をすかしているなら、裁きを受け**集まること**にならないように自分の家で食べなさい。このほかのことは、わたしがそちらに行った時に決めることにします。(1 コリ 11 章 17-20 節、33-34 節 フランススコ会訳)。

【*synághein* と *synérchomai*】 新約聖書のなかには *ekklēsia* の他に、キリスト者がともに集まる「集い」を表す動詞があります。それが *synághein* と *synérchomai* です。

しかし、それは物理的な「集い」だけを指すわけではありません。その点で最初のみ言葉の箇所は興味深いでしょう。パウロは身体的には「集い」にはいないのです。しかし、主イエス・キリストの名のものに集った信者たちに、パウロは霊的に一緒にいるとハッキリと言います。

*synérchomai* の使われ方をみると、具体的な「集い」の姿が分かります。第二のみ言葉の箇所がそれをよく表しています。この箇所を岩波書店の訳では次のようになっています。

17 さて、以上のことを指示するに際して、[次の点では] 私はあなたがたを称讃するわけにはいかない。すなわち、共に集う [時に]、あなたがたがより望ましいあり方へとではなく、むしろより悪しきあり方へと [向かっている] ことである。18 というのも、まず第一に、あなたがたが教会に集う時に、あなたがたの間に分争があると私は聞いており、そしてある部分はそれを信じているからである。19 実際、あなたがたの間に [まさに] 適格者たちが明らかになるためには、あなたがたの間に分派もまたなければならぬ。20 さて [話をもとに戻して]、あなたがたが一堂に集う時、主の晩餐を食べることが不可能になっている。……33 かくして、私の兄弟たちよ。食事のため

に集うときには、互いを待つようにしなさい。34 もしも誰かが飢えてい [て先に食べようとす] るなら、その人は家で食べなさい。それはあなたがたが、共に集まってさばかれることのないためである。(1 コリ 11 章 17-20 節、33-34 節 岩波書店訳)。

この *synághein* と *synérchomai* の二つの動詞は初代教会の生き生きとした姿を表現しているかのようです。人々は集まり、祈り、パンを裂き、一緒に食事をしていたのでしょう。しかし、平和そうに見える食卓にも分派争いがあった。教会が抱える「不一致」という現実はずねに存在したのです。

ともに集うという事実が教会を表します。それは、あのカイアファの預言的な言葉にも表れます。イエスは「国民のためばかりでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるために死ぬようになる」という預言です(ヨハ 11 章 52 節)。イエスの死によって、ユダヤ人ばかりではなく、イエスを信じる人々が一つに集められるという意味だそうです。『ヨハネによる福音書』が成立した時点で、ナザレのイエスの十字架の上での死のおかげで人々が一つに「集う」という理解があったのです。そうしますと、教会という「集い」の一番の土台にイエスの受難と死、そして復活があることが分かります。

## 2 聞く教会の具体的な姿

東京教区は、2021年の秋からシノドスの取り組みをしてきました。わたしも教区シノドス担当者に任命され、いろいろなことを考え、いろいろな話し合いを重ね、いろいろな方々にお目にかかり、クマちゃんと動画を撮りながら、過ごしてきました。初めは本当に何も分からないところからスタートしました。第二バチカン公会議の公文書を読みなおして、さらには東京教区の公会議後の半世紀におよぶ歩みを振り返りました。

シノドスとは言葉の成り立ちに示されているように、「ともに歩む」ことです。ですから「シノドス的な教会」とは「ともに歩む」教会とならなければなりません。シノドスから「シノドス性（シノダリティ）」という名詞が生まれます。これについては日本語の訳語が定まりません。「協働性」と訳す場合もあります。また、「シノドス的」という表現も「協働的」と理解することも可能ですし、カトリック中央協議会の表記のように「ともに歩む」とも理解することも可能です。非常に広い概念を含んだ言葉ですから、簡単には定義できないと思います。しかしながら、第二バチカン公会議以降の教会全体の歩み、そして日本のカトリック教会の歩みを振り返ってみると、確かに主の教会は「ともに歩む」教会を目指してきました。意識せずとも「シノドス的」教会となりつつあります。

「ともに歩む」ためにどうしても必要なのは「集い」であり「交わり」です。「交わり」を築いていくためには「分かち合い」がやり方、すなわち方法論として欠かせないと思います。

教会には「出会い」があります。神と人との「出会い」、人と人との「出会い」。教会の中に「出会い」があふれています。「出会い」は「交わり」と生みます。ですから、教会には豊かな「交わり」があります。エウカリスチア祭儀は「交わり」の場面であり、「交わり」の時です。この「交わり」は主イエス・キリストの受難と死、復活を通じてなされていきます。秘跡はキリストの過越秘義に組み入れられ、与って行くことですから、御父との「交わり」をキリストが生きているのと同じように、わたしたちは洗礼を通して、エウカリスチア祭儀の中でこの「交わり」を祝うのです。

そして、「交わり」は「一つであること」へと向かいます。一致へと向かいます。この地上では不完全な「一致」であっても、終末の完成の時にわたしたちは三位一体の神と顔と顔を合わせて「交わり」、さらには「一つであること」を体験するのです。教会は、この世的な機構を持ちながらも、この「一致」へと向けて歩んでいきます。

いわゆるコロナ禍でわたしたちの教会が持っている「交わり」が壊れかけました。これからは「交わり」の回復に努めなければならないでしょう。シノドスへの取り組みで「分かち合い」が「交わり」の回復に効果があると分かりました。難しいことではありません。信仰の共同体の中であれこれと「交わり」を重ねていくのです。東京教区のシノドスチームのあるメンバーは「田舎の教会のおばあちゃんたちが、ミサの後におしゃべりしている。一番教会を生きている人は、こういったおばあちゃんたちかもしれないと話してくれたのは印象的です。

こういった「分かち合い」を重ねることで信仰の共同体である小教区共同体が体験するのは「共同責任」と「共同識別」です。こうして、信者の共同体はキリストの背丈にまで成長する「自己形成」を体験します。

「共同責任」、「共同識別」、「自己形成」この三つが、現時点でわたしが理解している「シノドスの教会」の姿です。では、どのように「聞く」ことを大切にする教会はどのような具体的な姿になるのでしょうか。午後はこの点について少し考えてみましょう。

## 2.1 イエスさまに語っていただく教会

少し変なタイトルかもしれませんが。小教区共同体の中にイエスさまの言葉が響いている必要があると思います。もちろん、そこに「集う」信者（信者ですから聖職者も含みます）の一人ひとりのところにもイエスさまの言葉が響いている必要があるのです。み言葉をいただきましょう。

8・28 イエスが向こう岸のガダラ人の地方に着かれると、悪霊に取りつかれた者が二人、墓場から出てイエスのところにやって来た。二人は非常に狂暴で、だれもその辺りの道を通れないほどであった。29 突然、彼らは叫んだ。「神の子、かまわないでくれ。まだ、その時ではないのにここに来て、我々を苦しめるのか。」30 はるかかなたで多くの豚の群れがえさをあさっていた。31 そこで、悪霊どもはイエスに、「我々を追い出すのなら、あの豚の中にやってくれ」と願った。32 イエスが、「行け」と言われると、悪霊どもは二人から出て、豚の中に入った。すると、豚の群れはみな崖を下って湖になだれ込み、水の中で死んだ。33 豚飼いたちは逃げ出し、町に行き、悪霊に取りつかれた者のことなど一切を知らせた。34 すると、町中の者がイエスに会おうとしてやって来た。そして、イエスを見ると、その地方から出て行ってもらいたいと言った。（マタ8章28-34節 新共同訳）。

イエスさまが宣教なさったのはガリラヤ湖という湖の北側です。ガリラヤ地方と呼ばれています。ガリラヤ湖の西半分がガリラヤ地方です。そのあたりは、イエスさまが宣教なさった場所がたくさんあります。例えば湖畔の町であるカファルナウムはイエスさまの宣教の拠点でした。ところがガリラヤ湖の東半分はデカポリス地方と呼ばれています。これは、ギリシアの文化（ヘレニズム文化）のもとにある地方です。ガダラはガリラヤ湖の東側の湖畔の町です。

悪霊に取りつかれた二人の人が、町の共同体から離れて墓場に住んでいました。誰も彼らのそばに行かないほど、彼らは狂暴だったのです。しかし、悪霊はイエスさまが来ると「神の子、かまわないでくれ」と叫びます。悪霊はイエスさまの正体が分かっていたのでしょうか。そして、イエスさまが近寄ることで、二人の人を苦しめている事実がはっきりするのを恐れたのかもしれません。ちょうど、豚飼いが多くの豚を飼っていました。野原で飼っていたのでしょうか。ユダヤ人は豚を忌み嫌いますので、これはユダヤ人ではない、つまり異教徒が暮らしていることがわかります。そして、悪霊たちはあの豚のなかにやってくれと懇願します。それでイエスさまはただひと言、「行け」と命じたら、悪霊たちは豚に乗り移り、豚は崖から湖へと落ちていきました。



この物語で少し気になるのは最後のところです。「すると、町中の者がイエスに会おうとしてやって来た。そして、イエスを見ると、その地方から出て行ってもらいたいと言った」（マタ8章34節）とあります。人々は豚が湖に入った出来事に驚いて、イエスに会いたいと思って、わざわざイエスさまのもとに来ました。しかし、ここから出て行ってくれと願うのです。なぜでしょうか。

いろいろと黙想してみると興味深いです。恐らくガダラの人々は自分たちの秩序で生きていたのでしょう。まず、穢れた場所である墓場に二人の悪霊に憑かれた男がいる。それについてはここが動かない。かわいそうだとも思わない。無関心。悪霊とのやりとりがあって、イエスさまが「行け」と命じた。豚が湖になだれ落ちた。びっくりした豚飼いたちは、町でそのことを知らせる。町の人々の関心は一人のユダヤ人であるイエスが大切な豚を湖になだれ込ませたことにある。二人の男のことには微塵の関心も示さない。それで、イエスに会ってみたいと人々は思うが、それは、自分たちの生活の秩序を壊してしまうイエスさまへの恨み辛みがあったからでしょう。神さまを讃えるためではありません。

出て行ってくれという人々の懇願は、もう自分たちの生活に関わらないでくれ。波風を立てないでくれということだと思います。そうすると、イエスさまも黙ってしまう。この物語ではイエスさまはひと言だけ語っています。「行け」。いくらイエスさまが語っても、人々は自分の関心と自分の価値観、そして自分たちの秩序で生きているから、響かないのです。

**【耳を傾けていく】** この物語を黙想してみると、今の小教区共同体と関係があるように思うのです。

この半世紀、わたしたちは小教区共同体を作り上げてきました。それはそれで尊い歩みだったと思います。しかし、いつの間にイエスさまの声が響かない。あるいはイエスさまが語りたくても語れない信仰の共同体になってしまったようにも思うのです。つまり自分たちが築きあげた秩序だけで共同体を保とうとしている。

わたしは「バザーとバーベキューの教会になっていませんか？」と、一年前に東京教区ニュースの紙面で問いかけたことがあります。割と反応はありました。実際にコロナが第五類となって、またバザーを再開しようとする小教区共同体はけっこうあります。バザーが悪いのではなくて、行事だけに彩られた共同体には人と人の本当の交わりはあるのでしょうか。ましてや十年一日のごとく同じようなバザーをしていて本当によいのでしょうか。行事やバザーだけではありません。教会の中にある活動グループや運営協議会なども本当の交わりが生まれているのでしょうか。そもそも、イエスさまの声に耳を傾けて、イエスさまのおこころに従って活動や教会運営をしているのでしょうか。

## 2.2 気づく教会

教会が耳を傾けて「聞く」よりも前に、様々な生活のあり方、生き方が存在することに「気づく」必要があるでしょう。2000年代以降、日本社会は自己中心的な社会となりつつあります。他者への関心は薄れつつあります。さらにこの数年の新型コロナウイルス感染症蔓延は、人と人とのつながりを断ち切る

ものとなりました。誰もが感染を恐れ、誰もが孤立の中にあります。そのような状況の中で、どのような生活があり、どのように人々が一生懸命に生き、どのような困難に直面しているかに「気づく」ことこそが何よりも重要だと思います。

**【無関心な社会】** 2000年代以降の社会の急激な変化は目を見張るものがあります。そして、生活のあり方、生き方が多様化してきました。このような多様化は突然現れたのではないでしょう。日本社会の低迷と結びつくように思います。成長と発展を目指した社会にあっては、多様化した生き方は認知されません。すべての人が同じ目標に向かうようにと仕向けられているからです。しかし、低迷し目標を失いかけた社会では、それまで気がつかなかった人々の存在と暮らしが浮き彫りになってきます。

加えて、社会の人権についての理解の深まりもあります。社会には多様化した生き方の一つひとつを受け入れるだけの素地がまだありません。こうして、少数者（マイノリティー）がやり玉に上がり、批判され、否定されていきます。外国人労働者、性的マイノリティー、障害者、格差の底辺にある人々、若者と子どもたちといった少数者の人権を保護し、共存しようとする社会を標榜すればするほど、彼らは差別の現実の中にさらされるようになるのです。

これに加えて近年のコロナ・パンデミックがあると思います。人と人の距離を引き離そうとする力のようなものが社会の中にあるのです。その結果、「自分さえよければ」という生き方が幅を効かしています。

**【信仰の先達】** 隣人に「気づく」のを忘れ、自己中心の生き方が横行する日本の社会にとって、教会の信仰の先輩たちの生き方は参考と励ましになると思います。コルカタの聖テレサ（マザー・テレサ）は誰からも愛される聖人です。貧しい人がいる事実「気づく」生き方を聖女はしました。困難な日々に出会っても福者高山右近は自分中心の生き方から、他者のために尽くす生き方へと生涯をかけて変えられていきました。蟻の町のマリアと呼ばれた尊者北原怜子は、少数者とともに生きる生き方を選びとりました。このような「気づく」ことを大切にし、その人々とために生きようとする生き方を教会は社会に対して提示してもよいと思います。

**【まなざし】** 「教会の教え」を使って少数者を裁いている人々が教会の中に存在します。特にいのちと性に関する領域で社会の少数者として生きていかなければならない人々を裁いているのは、残念でなりません。また、子どもたちや若い親たちにやさしいまなざしを送れない信仰の共同体（小教区共同体と信者が集う小共同体）があるのも確かです。他者に優しいまなざしを送れない兄弟姉妹も教会にいるという事実を重く受けとめる必要があるでしょう。

**【気づきから改革へ】** かつて「完全な社会」（*societas perfecta*）とその機構の堅牢さを教会は誇っていました。しかし、第二バチカン公会議が示した教会の姿は「教会は絶えず改革されねばならない」（*Ecclesia*

*semper reformanda est.*) というものでした。なぜなら、教会は「人的要素と神的要素を併せ持つ複雑な実在」(LG 8) であって、「自らの懐に罪人を抱いている」(LG 8) ものです。この世にあっては不完全でありながらも、主イエス・キリストの再臨の時まで教会は絶えず清められ、改革されるべきであるというのが公会議の主張です。「改革されねばならない」という自らのうちに課された使命に教会は目覚める必要があります。これは信仰の共同体である小教区共同体にも当てはまると思います。

## 2.3 白黒つけない教会

教会に集う人々にはちょっとしたエリート意識のようなものがあるかもしれません。そして、善悪の判断を教会の教えや教会の指導者（「教導職」と言います）に委ねてしまい、ちょっと高いところから社会を判断している傾向があります。今の言葉で言えば「上から目線」です。確かにわたしが子どもの頃に育った教会はそうでした。何か困りごとがあれば司祭のところに相談に行きましたし、社会の判断の基準のようなものをカトリック教会がすべて持っていると感じていました。しかし、現代の社会は白黒つけることが困難な時代となっているようです。そして、教会の中にはいろいろな立場の人がいてもよいのだと思うのです。

**【判断の難しさ】** 3年前、2020年の春からいわゆるコロナ（新型コロナウイルス感染症の蔓延）が始まりました。そして今でも続いています。東京教区も対策をしました。もう詳しくはお話しする必要がないでしょう。あの時、聖職者であれ信徒であれ自分たちの判断であの局面を乗り切った訳ではありませんでした。教区の勧めに従いました。それはそれで正しかったと思います。あのようなパンデミックの場合には権威による統制は必要だからです。しかし、事態が刻々と変化しているにも関わらず、なかなか日常の生活には戻れませんでした。今もなお戻っていません。判断の是非が分からなくなってしまっているというのが正直なわたしの感想です。同じことはロシアによるウクライナ侵攻についても言えます。確かに一つの国が隣国に攻め入っていくのは間違っています。しかし、ロシアが悪でウクライナが善とはわたしにはちょっと言えないです。なぜなら、これまでのプロセスを考えると、何か別なものがあるようにも思えてくるからです。もちろん攻撃によって傷つき倒れた人々のことを思うところが痛みます。原発の汚染水のことを新聞を賑わせていますが、わたしにはわかりません。どうしたらよいのか。皆さんはいかがですか。マイナンバーカードの件についても、わたしはよくわかりません。

このように、現代の社会は白黒をはっきりとさせることが難しいようになっていると思います。

**【教会にはいろいろな立場の人がいてよい】** シノドスのロゴマークが示すように、老いも若きも、男性も女性も、社会の少数者も、奉獻生活者（修道者）も聖職者も、さらにはまだキリストの福音を知らない人も、「ともに歩む」のが教会です。その歩みはゆっくりとしたものであったとしても、「向かう途上」で数知れない出会い、対話、分かち合い、交わりが生まれると、わたしは信じています。

現代社会には「排除の論理」が横行しています。しかし、どんな方でも隣人として、キリストの兄弟姉妹として受け入れる教会を目指して、今回の「世界代表司教会議 第16回通常総会」は開催されるのです。

### 3 いくつかの設問

これまでのテーマに基づいて、さらに理解を深めるためのいくつかの設問を用意しました。グループや委員会などで分かち合いのテーマとしてください。

**【「集う」教会】** 午前中の強調点は教会は「集い」だということです。そして、お話では触れませんでした。この「集い」の真ん中に主イエス・キリストがおられます。ですから、ミサ（エウカリスチア祭儀）は教会の中心です。

- あなたにとってミサとは何ですか？
- ミサのどの部分が好きですか（朗読、歌、感謝の典礼、平和のあいさつ etc.）
- ミサに与って（参加して）、よかった体験があったら教えてください。

**【「聞く」教会】** 午後は「聞く」教会の具体的な姿についてのお話でした。イエスさまの声に「耳を傾けて」、社会のさまざまな場面におられるイエスさまに「気づく」、そして「白黒つけない」で多くの人々と「ともに歩む」教会です。

- イエスさまの言葉で、どれが一番好きですか。
- あなたの人生、あなたの教会活動でイエスさまの言葉は響いていますか。その言葉に耳を傾けていますか。
- あなたの周りにいる人々の様子に気がついていませんか。教会で隣に座った人に関心がありますか。
- たとえイエスさまを知らなくても、それでもイエスさまのように生きていたいと願っている人々が社会の中にたくさんいることに気づいていますか。
- 小教区共同体のあり方を少し変えたいと願っていますか。
- 社会の風潮に流されて簡単に人を裁いていませんか。
- 一生懸命に生きている人々に対して、「かわいそうな人」のような「上から目線」で見えていませんか。彼らへの理解と共感がありますか。